

Title	序
Sub Title	Préface
Author	佐藤, 朔(Sato, Saku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

慶応義塾大学のフランス文学科は、明治四十三年（一九一〇）に永井荷風が着任し、翌年から「三田文学」を発行した時を創始とすれば、すでに七十余年の歴史をもっている。荷風の意図は慶応義塾の文学部で外国文学を紹介し、わが国の文学の創作活動を新鮮なものにすることにあった。けっしてフランス文学をアカデミックに研究し、厳密な論考を行ない、または新しい文学理論を打ち立てるというのではなかった。すべてが文人趣味風であったが、これは戦前の文学科の一般的な風潮といっていえないことはない。

フランス文学科がアカデミックな色彩を濃厚にして来たのは、戦後の新制大学になった昭和二十四年（一九四九）以後のことである。その時期には白井浩司君は、塾のフランス文学科に迎えられて、教鞭を取ることになった。しかし、彼が卒業した昭和十五年前後にはまれに見る多彩な人物が揃っていて、その後小説家、詩人、演劇人、ジャーナリストで一流になった者が多い。戦前と戦後でフランス文学科に学ぶ者の数が異なり、戦後はおよそ三十倍ぐらい多くなっている。卒業生もさらに多彩になっているが、一方フランス文学をアカデミックに研究する者も急激に増加した。

昭和三十年（一九五〇）ごろ、白井君は学の内外で熱心に現代フランス文学を翻訳・紹介し、これには私もかなり協力したけれど、他の大学ではまだあまり手をつけていない領域のことなので、当時現代フランス文学は慶応という評判を取った。だから講義題目、文献蒐集、学会発表、海外留学などのテーマを見ても、近代、現代文学を対象とするものが多かった。現在はさらに仏語学、中世文学、十七、十八世紀文学を専攻する新進気鋭の学徒も少なくなき、研究・教育体制もすっかり整って来ている。

白井君は現代フランス文学に関する旺盛な翻訳活動の傍らサルトル、カミュの研究に携り、好著『アルペール・カミ

『その光と影』を刊行した。サルトルとカミュの日本への紹介について、慶応のフランス文学科の果した役割は頗る大きかったと思うが、彼がその有方なメンバーの一人であったことは否定できない。私はこの二作家の翻訳全集の監修者として名を連ねていたので、そのことをよく承知している。実存主義文学を戦後の一時期における流行としてとらえるときは、これはすでに過去のものとなつていられるかも知れない。しかし、文学作品や著作を学問研究の対象とすることは、いつも流行がすぎたからであるから、サルトル、カミュともに研究はまだこれからであり、先駆者白井君はそれに着手していたといえる。

文学の研究、創作活動、文学の周辺の諸芸術、さらに日本文学や文化まで考えて、それらとフランス文学の関連させるとなると、時代、国家、民族、ジャンルなどを越えてさまざまな結びつきがあり、そこから現在、新しい学問的な考えや方法が生まれつつある。他方、時代遅れとされる考えはどしどし捨てられて行くが、文学、芸術、文化には、単に時代の変遷だけで取捨選択すべきではない要素がいくつもある。研究者はそれを冷静に分析することになるが、いわゆるフランス文学者にはかなり批評家、作家としての一面があり、そうした仕事を行っている者も多い。かつて白井君の同級生たちが多彩であったように、彼の後輩や教え子たちもその意味で多彩を極めている。

白井君に献げた本記念論文集は、彼に続く真摯な学究たちの専門的な論考ばかりであるが、彼らの活動範囲は一段とひろく、教師として、作家として、対談者として、あるいは何かの知的探求者として時代を背負っている人々が少なくない。ここにまた本書の第二部の特長が見られると思う。

一九八二年十月

佐藤 朔